



衣川 実介

## 『 肥後守 (ひごのかみ) 』

子供の頃、竹とんぼや杉鉄砲、ドングリゴマや水鉄砲、材料を集め自分で切ったり削ったりして作り、友達と一緒に遊んでいました。そんな時、いつもポケットに入っていたのが携帯用の折りたたみナイフ『肥後守』でした。ほとんどの子供達が便利に使った道具で、たまには鉛筆も削りますが主には遊び道具で、刃が切れなくなると井戸端の流しにある砥石で研いでいました。

2009年10月に『鉄のふしぎ博物館』を見学されたI氏、岐阜県で工業用の刃物を研磨している彼。展示されている『肥後守』ともう一つのナイフ、これは新潟県在住の刃物鍛冶、岩崎重義師匠にナイフづくりを教えて頂いた時のもの、を持ち出してマイクロスコープで刃先を確認。このナイフすごい立派な刃先だな。(後者)それもそのはず、ナイフづくりの時、完成せずに師匠のところに預け、仕上げ・研磨は師匠が手がけ銘(朋友)まで刻んでお送り頂いたものです。

『刃の研ぎが雑だな。』神戸の地場産業製品展示会で一緒になった三木の業者に『肥後守』の刃先について言いました、前記の話と共に『肥後守』1丁を注文しました。『昔はみんな自分で研いでいたので、出荷段階ではこんなものなのです。』(刃物業者)『私は刃物を研ぐことが出来ません。』そう言うと、『しょうがない、わしが研いでやろう』(顔見知りの刃物業者)1時間ほど経って、『砥石が無いから、一番後の部分はこれしか出来ないが、これで良いか?』綺麗に研ぎあがった『肥後守』。『前のものと全く違うな!』(私)やはりプロの職人が研いだ刃物は見違える出来栄でした。『お金はいくら?』『定価でええわ、あんたからは金は取れん。』こんなやり取りの『肥後守』と新潟生まれの『朋友』が『鉄のふしぎ博物館』に展示されています。ぜひ手にとって見て下さい。

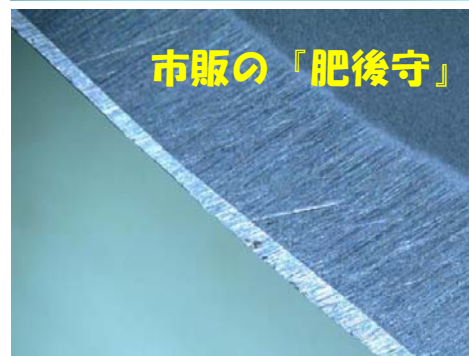
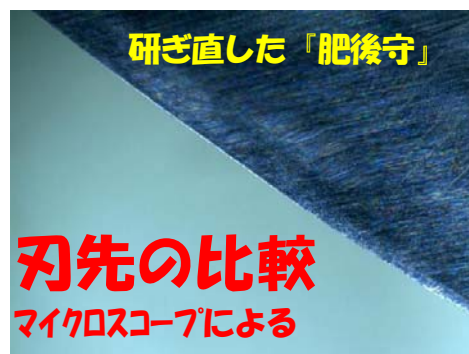


『肥後守』

肥後守は、明治時代中期、九州ではなく兵庫県三木市でつくられ始めました。

構造が簡単で安く作れるため、1950年代後半からは文房具の一つとして子どもにも行き渡り、私も含めて当時の子供達の必需品でした。

1960年10月に起こった浅沼稻次郎暗殺事件の犯人が少年だったことで、「子供に刃物を持たせない運動」が始まり、鉛筆削りや工作に使用していた肥後守をはじめとする刃物が子供から取り上げられました。刃物を使えない=自分で道具を作れない子供達が増えることは悲しいことです。



### 『鉄のふしぎ博物館』開館

来て! 見て! ふれて! ふしぎ体感

鉄を見る目がかかりますよ。

ぜひお越しください。

強力なネオジム磁石

石ころ

見学にはご予約が必要です。申込書をメール又は FAX でお願ひします。様式は以下にあります。

<http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/museum/hushigi.doc>

むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください!!